

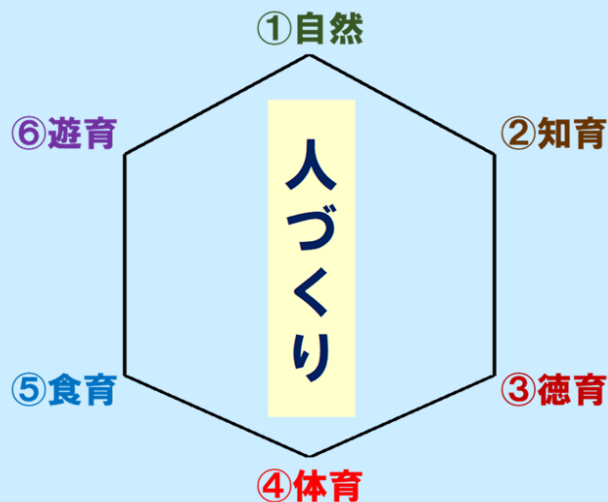
学ぶとは「自分の無知」に気づくこと。

優良図書、有用情報の所在案内（『生涯学習の友』）

## 『取って置きのノート』

②④臨時号 2024年10月

### 教育は6育(4)



### 『学校の未来はここから始まる』

木村泰子、工藤勇一、合田哲雄 著(教育開発研究所、2021年3月)

・子どもを「育てる」学校から、子どもが「育つ」学校へ。物事を二項対立で捉えない。分断を生む「選択」であってはならない。世界でも求められる「自律」「尊重」「創造」。

・学校の「ムリ」「ムラ」「ムダ」をなくす。「先生ががんばっているか」ではなく「子どもが育っているか」を見る。学校の自律性を高めるための合意形成を。すべてを解決してくれるリーダーなんていない。

「子供の教育は過去の価値の伝達ではなく、未来の新しい創造にある。」 デューイ

## 『子どもの「やりたい！」を自律した学びにつなげる「学びのミライ地図」の描き方』

山本崇雄 著(学陽書房、2022年3月)

・「学びのミライ地図」が描けない子どもたち。内発動機、「やってみよう」と挑戦する。自律型学習者を育てる教師の役割。自律を育てるのはガーデニングのようなもの。子どもが安心して自律できる場をつくる。

・学校の目的は、子どもたちが幸せになり、持続可能な社会を作る人となるよう育てること。4つのハピネス・マインド：①内発動機「やってみよう」②他者尊重「ありがとう」③未来志向「できないは可能性」④自己承認「自分らしく、笑顔で寛容に学ぶ」。

## 『教員という仕事 なぜ「ブラック化」したのか』

朝比奈なを 著(朝日新聞出版、2020年11月)

・日本の教員の授業時間は世界一少ないが、労働時間は世界一多い(OECD調べ)。教壇に立つ以外の業務負担が極めて過大。加えて、教員同士の人間関係も大きなストレスとなっている。“ムラ社会”化が進む現場で、追いつめられてゆく教員たち。

・昔から教職は「聖職」と言われ、無償の奉仕が「全体の奉仕者」として求められた。教員の仕事はそもそも「最初からブラック」。「ブラックになった」のではない。

## 『生物を分けると世界が分かる。分類すると見えてくる、生物進化と地球の変遷』

岡西政典 著(講談社、2022年7月)

・人類の本能から生まれた分類学の始まりは紀元前。アリストテレスからリンネ、ダーウィン……と、数々の生物学の巨人たちが築いてきた学問。私たちは、まだこの地球のことをこれっぽっちも分かっていない。それどころか、「分かっていないことすらも分かっていない」のである。

・分けて終わりではなく、それらを紡いでいくことも重要。生物の多様性のレベル(生態系、種、遺伝子)。「意味がない」ことが重要だった。

## 『太平洋戦争と子どもたち』

浅井春夫、川満 彰、平井美津子、本庄 豊、水野喜代志 編(吉川弘文館、2022年7月)

・戦争は子どもたちに何をもたらすのか。軍国少年・少女、教育勅語と御真影、学童疎開、沖縄戦、引揚、孤児生活など、47の問いに図版を交えて答える。

・戦争がどのように推進され、子どもたちの暮らしはどう変わったのか。戦争で最も被害を被るのは子ども。戦災の惨劇を記憶し、戦禍が再び子どもを覆うことのないよう平和への願いを託す。

---

---

## 『子どもに勉強は教えるな。東大合格者数日本一 開成の校長先生が教える教育』

柳沢幸雄 著(中央公論新社、2019年10月)

・子どもとの関係ですべての土台となる一番大切なことは「子どもにしゃべらせること」。自主性・自律性を重んじ、手取り足取りの受験指導や進路指導はしない。教育は、子どもを自立した人生を歩める大人にする「見守る勇気」が大切。

・親ができることは、子どもの話をよく聞いて褒めること。子どもは話すことで頭がフル回転し、知識も定着し、褒められて自信がつき学ぶ意欲に繋がる。

---

---

## 『教育虐待。子供を壊す「教育熱心」な親たち』

石井光太 著(早川書房、2023年6月)

・「教育熱心」と「教育虐待」は紙一重。「子供のため」と自分の行動を正当化する親の姿勢に、子供の将来を崩壊させてしまう要因があり、親はそのことに気づかない。そして取り返しのつかない結末となる。

・先行きの見えない社会の中で、親は子を立派に育てたいと思う。しかし、実際には親自身が不安で仕方がないのだ。その大きくなっていく不安を、「子供のため」という大義名分を振りかざし、子供を使って解消しようとしているに過ぎない。

---

---

## 『10才からの気持ちのレッスン』

黒川駿哉 著(アルク、2022年4月)

・これからの子どもたちに身につけてほしい教育領域「STEAM」。Science[科学]、Technology[技術]、Engineering[工学・ものづくり]、Arts[芸術・リベラルアーツ]、Mathematics[数学]。

・理数系の能力に加え、表現力や想像力といった非認知系能力もはぐくむ。自分やほかの人の気持ちとのつき合い方。大人だって難しい。こんなときどうする？ 自分にとっての「価値」って何だろう。

---

---

## 『6カ国転校生 ナージャの発見』

キリーロバ・ナージャ 著(集英社インターナショナル、2022年7月)

・ソ連(当時)に生まれ、両親の転勤で世界6カ国(ロシア、日本、イギリス、フランス、アメリカ、カナダ)に転校。それぞれの国での体験を切り口に、「当たり前」「ふつう」「常識」を問い直す。

・正解はない、違いがあるだけ。国が変わればベストも変わる。目的が変わればベストも変わる。子どもが変わればベストは変わる。ふつうの子も、つまらない子も、変な子もいない！

---

---

## 『教育×破壊的イノベーション。教育現場を抜本的に改革する』

クリステンセン・クレイトン、ホーン・マイケル、ジョンソン・カーティス 著、櫻井祐子  
訳、根来龍之／解説(翔泳社、2008年11月)

・教育はつねに改革を求められ続けている。そして、教育を良くして未来を良くしたいと願うあまり、良くするために多くのことをしようとする。何を捨てるかを議論せずに今の現状にプラスしていく。

・イノベーションには、確立した市場での性能改良を追求する「持続的イノベーション」と、無消費(消費が何らかの障害によって妨げられている状況)を市場化する「破壊的イノベーション」がある。

---

---

## 『学校アップデート。情報化に対応した整備のための手引き』

堀田龍也、為田裕行、稲垣 忠、佐藤靖泰、安藤明伸 著(さくら社、2020年4月)

・学校を「世間並みに」アップデートしよう。オンライン授業をどうするか……が大事なのではなく、学校自体をアップデートすることが大事。

・朝、登校したらまず電源を入れ、今日の体調などを入力するというルーティン。ICTはある程度自由に使わせないと使用頻度が上がらない。「使い方が悪いから使わせない」は本末転倒。

## 『捨てられる教師、AIに駆逐される教師、生き残る教師』

石川一郎 著(SBクリエイティブ、2023年12月)

・2040年、AIに淘汰されないために、いま教師ができること。「問い」をもって生成AIを使いこなせる人材を育てる。学ぶ動機を与えられる教師こそ、いい教師。

・9年間の義務教育にさえ、その仕上がりには誰も責任を持っていない。「知識を授けるだけの授業」から「思考で遊べる授業」へ。教養という「思考の種」を蒔く。

## 『子どもたちに民主主義を教えよう。対立から合意を導く力を育む』

工藤勇一、苫野一徳 著(あさま社、2022年10月)

・教育の役割とは何か？ 学校は何のためにあるか？ 究極の目的は「民主主義」教育だった。いじめ調査の目的は、苦しんでいる子どもがいないかどうかを探し出すことで、いじめの件数を減らすことではない。常に本質を問い続け、そしてそこに立ち戻る。

・誰一人置き去りにしない。多数決の問題は少数派を切り捨てること。「利害関係の対立をそのまま放置する」こと。当事者意識の低い日本。問題は、あなたが行動を起こすかどうかだ。

## 『お父さんが教える 13歳からの金融入門』

デヴィッド・ビアンキ 著、関 美和 訳(日本経済新聞出版、2016年7月)

- ・最初の一步は、身の丈にあった暮らしをする、貯金をする。収入の範囲内で生活する。老後になって困らないようにお金に働いてもらう。余裕のある範囲で。
- ・おカネの稼ぎ方・増やし方・使い方の基本。株式等の投資、資産運用は、じゅうぶんな知識を身につけるまでは、それはやっちゃいけない。

## 『こども「学問のすすめ」』

齋藤 孝 著(筑摩書房、2011年11月)

- ・小さいうちから「自分は何のためにこうしているのか」と考え方の背骨ができるよう、よく考える。賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとによりて出来るものなり。
- ・学ぶことは、自分の損得だけでなく、世界のため、未来のために生きる考え方が大切。勉強は自分で考え判断して、自分の力で生きていくために必要。

## 『教育の力』

苫野一徳 著(講談社、2014年3月)

- ・教育の目的：①自由に生きるための力を育む、②自由の相互承認の土台をつくる。これからの時代の「よい」教育：学力＝「学ぶ力」を育む。
- ・そのために、学びを「画一的、一斉」型から「個別化、協同化、プロジェクト化」の融合した形に転換する。学びの個別化により落ちこぼれを減らし、協同化により全体の学力を向上させる(学力格差が少なくなる)。

## 『ティール時代の子育ての秘密。あなたが輝き、子どももより輝くための12章』

天外伺朗 著(内外出版社、2020年6月)

・子育ての最大のコツは、まず、自分自身(親)が育つこと。親や先生が、「教育しよう、変えよう」と子どもに向けていた視線を自分の内面に向けた時、子どもは、はるかに光り輝く。

・子どもの存在をまるごと認める親に成長する。好きなことを自分のやりたいからやる「フロー状態」に子どもがなると、人生の土台が作られていく。そのためにはその邪魔をしないこと。

## 『学校では教えてくれない稼ぐ力の身につけ方』

小幡和輝 著、若林杏樹／イラスト(小学館、2020年11月)

・子どもも起業して稼ぐ！ AI時代の必須の力。自分の力で稼ぎを生み出す力“起業力”。「大人になったら、起業してみようかな」では遅い。小中高校生のうちに経験を積んだほうが絶対にいい。

・お金の勉強をしないから苦労している人が山ほどいる。時給で働くという概念を捨てよう。積み上げ型の仕事を作れ。新しい仕事を作ろう。

## 『教科書に載った小説』

三浦哲郎、永井龍男、松下竜一、広津和郎、吉村 昭、菊池 寛、安部公房、吉村 康、横光利一、リヒター、芥川龍之介 著、佐藤雅彦 編著(ポプラ社、2008年4月)

・中学・高校の国語教科書に載った短編小説が12篇。『とんかつ』三浦哲郎 『出口入口』永井龍男 『絵本』松下竜一 『ある夜』広津和郎 『少年の夏』吉村 昭 『形』菊池 寛 『良識派』安部公房 『父の列車』吉村 康 『竹生島の老僧、水練のこと』古今著門集 『蠅』横光利一 『ベンチ』リヒター 『雛』芥川龍之介

・普通なら、出会えないような珠玉の作品群。成長する道程に置いておくので「読んでほしい」、というかすかな願い。「面+白い」というのは、新しい事象や関係性を発見することによって、目の前がぼっと明るく開ける状態を語源としている。

## 『校長の挑戦。10人の校長が語る、学校改革の軌跡』

『教職研修』編集部 著編(教育開発研究所、2022年3月)

・学校教育の行く末を校長が左右する時代。校長も学び続けるべき存在。校長が「挑戦」すれば、学校は変わる。責任は校長が取る覚悟で失敗を恐れない。学校教育は一步前に進む。

・とにかくやってみる。一貫した信念があること。子どもを育む仕掛けをもつこと。子どもを主語にした学校経営であること。教職員と共有する。

## 『自分で学べる子の親がやっている「見守る」子育て』

小川大介 著(KADOKAWA、2021年1月)

・子育ての「正解」、それは子どもが教えてくれる。「見守る子育て」において親が心がけたい3つの原則：①「自信」を持つ ②「学びの技術」を得る ③「習慣」を身につける。

・親が頑張りすぎないほうが子どもは伸びる。子育ては「2勝8敗」で十分。怒りも不安も「わが子への愛情」から来ていると知る。「なんでだろうね」を口ぐせにする。

## 『2050年を生き抜く子を育てる「もうひとつの学校」』

小針一浩 著(サンクチュアリ出版、2024年3月)

・今の小学生が働き盛りとなる頃、世界は2050年を迎えている。地球温暖化や環境破壊、シンギュラリティ、大災害、人口減少……。さまざまな「避けられない課題」をクリアしながら、彼らは生き抜いていくことになる。

・優秀な子になるのではなく、最高の自分になる。湘南ホクレア学園のサバイバル力 3スキル：①「コミュニケーション」=世界の誰とでも仲間になれる。②「起業スキル」=世界のどこでも新しいことを創り出せる。③「アウトドアスキル」=世界のどんな環境でも暮らせる。



## 『国語の成績は観察力で必ず伸びる』

久松由理 著(かんき出版、2022年4月)

・読み聞かせだけでは国語力は伸びない。ポイントは「観察力」。事実と意見を分けて作文し、客観的に「もの」を見る目を育てることが基礎になる。

・「観察眼」を磨いて読解力と作文力を伸ばす。 **国語力=見落とさない観察力+固執せず色々な考えに心開く客観力+表面意味でない言外の深い意味への推測力。**

## 『校長の覚悟。 稀代の校長5人に問う、校長のなすべきこと』

『教職研修』編集部 著(教育開発研究所、2020年3月)

・使命感と勇気。 校長は常に機嫌よくしておく。 職員室にどのような組織文化を根づかせるか。 教育実践は、他校の真似をしてもうまくいかない。

・学校にある多くの「壁」を溶かしていく。 先が見えない未来に責任を持つ「覚悟」。 職員が笑顔で生き生きと働ける職場づくり。 100回言い聞かせるより、システムをつくることが大事。

## 『2040 教育のミライ』

磯津政明 著(実務教育出版、2022年6月)

・メタバース、WEB3、VR、AR、MR、プログラミング的思考、探究学習、PBL、海外進学……。 ソニー流「学びの科学」で未来の教育はこんなに変わる！

・教育+技術(Education + Tech)でEdTech。 教育は決してだまっていて、上から自動的に与えられるだけのものではない。 自分で求め、何処までも自分で追求して行くのが真の教育の姿ではないだろうか。

## 『子どもが育つ条件。 家族心理学から考える』

柏木恵子 著(岩波書店、2008年7月)

・育児は育自。 母親に子育ての第一責任を押し付けることが 少子化の一因。 子育てを通して大人は成長でき、子育てを責任を持って「しない」父親は 大人の成長が得られず。 リタイアしてから 成熟していないゆえの 問題が露呈する。

・母親が抱く育児不安は日本特有のものだという。 その理由は主に、①育児の主体が母親になっている、②それに伴う父親の不在、③育児にかかりきりになり母親自身の成長(=人生)が阻害される。

## 『自律と尊重を育む学校』

工藤勇一 著編、小林弘美、菅原千保子、関根奈美江、加藤智博、戸栗大貴、松島亜矢 著(時事通信社、2022年5月)

・大事なものは「なんのためにするか」という目的意識。 できること、できないこと、やったほうがいいこと、やらないほうがいいこと。 手段と目的が合致しているか。 手段は常にアップデートされているか。

・大人が手をかければかけるほど、生徒は自律を失う。 手をかけられ続けた生徒は、うまくいかないことがあると人のせいにする。 自己決定した結果、どんなことが起きそうか一緒に考えよう。

## 『教室ギア55。 子どもの「やりたい！」をくすぐるアイテム』

鈴木優太 著(東洋館出版社、2021年3月)

・主体的・対話的で深く学べる子どもたちを育む「土台」となるのは【教室環境】。 教室という土台が安定していると、学ぶ子どもたちの心も身体も、そして授業も「安定」する。 教室の「すべて」を子どもたちのために。

・まずはやってみる！ そして、それを自分なりに「カスタマイズ」していく。「失敗を笑わないクラス」よりも「失敗を笑い飛ばせるクラス」を目指したい。

## 『14歳からの哲学。 考えるための教科書』

池田晶子 著(トランスビュー、2003年3月)

・「哲学」とは、世界や人生などの根本原理を追求する学問。今の時代、短絡的に答えを見つけるのもよい。しかし、時には答えのないことに思いを巡らし、「あーでもない、こーでもない」と、あるいは「こうしたらあーなって、あーしたらこうなって」と考える訓練も、とても大切。

・考えるとは自分との対話。哲学とは、自分で考える学問。自分で深掘りするしかない。生きる上で不可欠なものは「考えること」。この世のあらゆるものが、「存在する」ことが、いかに「有り難い」ことか。

## 『14歳からの社会学。 これからの社会を生きる君に』

宮台真司 著(世界文化社、2008年11月)

・【自分】と【他人】…。「みんな仲よし」じゃ生きられない。「本物」と「ニセ物」を見わける力をつける。学校教育の原点は、軍隊と監獄。「整列、気をつけ、前に習え、やすめ」。

・人を幸せにする力のある人が幸せになれる。自由とは自分で自分を支えること。仕事を通して自己実現という、生きがいの土台を外部に置くのをやめて、「自分はこれがあれば幸せ」を探す。試行錯誤が大事。

## 『教えることの復権』

大村はま 著(筑摩書房、2003年3月)

・日本の教育界では、「教える」ことよりも「学ぶ」ことに重点を置きはじめたように見える。教えるということにもっと真摯に向き合う。もう一度きちんと考え、何ができるか、何をすべきか、または何をしなければならぬか。うまく学ぶことのできない生徒たちを、何とか学ぶことができるように指導するのが教師の仕事。

・教師のもっともいい姿は、「新鮮」だということと「謙虚」だということ。身をもって教えるということは、課題に応じて、頭のはたらかせ方、そもそもどのように頭をはたらかせることが「考える」ということなのかを、具体的に示すことではないか。

## 『教育のワールドクラス。 21世紀の学校システムをつくる』

アンドレアス・シュライヒャー 著、鈴木 寛、秋田喜代美／監修、経済協力開発機構 (OECD)、ベネッセコーポレーション 編、小村俊平、平石年弘、桑原敏典、下郡啓夫、花井 渉、藤原誠之、生咲美奈子、宮 美和子 訳 (明石書店、2019年9月)

・学校内外のイノベーションを促進する。 今日、簡単に教えたりテストしたりできる事柄は、コンピュータや機械で容易に行われるようになった。 こうした21世紀の変化をコントロールし、よりよい世界を構築するためには、私たちの想像力、認識力、責任感こそが必要となる。

・加速する時代で知識、スキル、人間性を育てる。 これからの学校は、生徒が自ら考え、職場でも地域でも、共感する心をもって他者と交流するようサポートしなければならない。 学校は、生徒がゆるぎない善悪の判断力と他者の意見を尊重する力を育む場となるべきである。

## 『PTAモヤモヤの正体。 役員決めから会費、「親も知らない問題」まで』

堀内京子 著 (筑摩書房、2021年9月)

・ライフスタイルも働き方も多様化している時代、PTAの存在が時代に合わなくなっているのでは。 会費の一部は上部団体への「上納金」。 PTAの問題にメスを入れれば、学校も変わらざるを得なくなる。

・役員や会員は1年から数年で入れ替わる為、当事者性や問題意識が持続しない。 同調圧力が強い為、反対の声を上げるのが難しい。 PTAの仕事を改革したいと思っても、根回しや交渉が必要で、コストとメリットを考えると何もしないのが合理的な判断になる。

## 『教育を経済学で考える』

小塩隆士 著 (日本評論社、2003年2月)

・教育の原動力は夢。 教育は投資と消費、両方の側面を持つ。 消費は現在の効用を高めるため、投資は将来の収益のために行う。 階級や学歴の「再生産」。

・教科書のレベルを下げれば、落ちこぼれは減るが、国際競争力は下がる。 教科書のレベルを上げれば、落ちこぼれは増えるが、国際競争力が上がる。

## 『大人(は、が、の)問題』

五味太郎 著(講談社、1996年11月)

・子どもにとって大人は有害！ いじめ、閉じこもり、不登校……。子ども問題は、世間を気にし、教えたがり、試したがる大人に問題がある。子どもは、大人の充足のためのものではない。新人、ルーキーだ。「これから何をやるんだろう」「いつ化けるかな」と、大人は緊張し、楽しみに見守るサポーターになろう！

・大人になると忘れてしまうこと。こどもだけが思っていること。「学校に行きたくない」と子どもが言ったら、「じゃどこに行きたいの」と聞くのがふつう。それが「どうして行きたくないの」になってしまう教育の不思議！

## 『くらしから世界がわかる 13歳からのニュースウィーク』

栗下直也 著、ニュースウィーク日本版編集部 編(CCCメディアハウス、2022年12月)

・これからも貧しくなっていく日本。「失われた30年」で貧しくなった「安い国」。時事問題を単なる“事実の暗記”ではなく、“ストーリー(流れ)で理解”する。

・日常は「考える力」をみがく、面白いことで満ちている。問いを見つけ、自分で考える。大人も子どもも、みんなが勉強して生きていく時代に。

## 『君たちが生き延びるために。高校生との22の対話』

天童荒太 著(筑摩書房、2022年12月)

・幸せになるには、自分を大事にして生きることが大前提。誰にもある「ルック・アット・ミー(わたしを気にして)」と言う権利を自覚し、しっかり生き延びてほしい。

・からだの内側の細胞を意識しよう。「宇宙のリズム」を感じよう。社会が変わるには時間がかかる。「好き」を追いかけよう。

## 『父が子に伝える 13歳からのお金に一生困らないたった3つの考え方』

石原尚幸 著(三笠書房、2022年6月)

・「お金を稼ぐ」にはどうする？ 世の中の「お困りごと」を見つければいい。「お金を減らさない」ためにはどうする？ お金が「漏れている」穴をふさげばいい。

・「自分に投資」しよう。「行動を具体化」しよう。「大きなお金」から節約していこう。「お金」に働いてもらおう。日が当たらないときも、頑張り続けよう。

## 『へいわとせんそう』

たにかわしゅんたろう 著、Noritake／イラスト(ブロンズ新社、2019年3月)

・くらべてみると、みえてくる。「へいわのボク」と「せんそうのボク」では、なにが変わるのだろう。同じ人や物や場所を見開きごとにくらべると、平和と戦争のちがいがみえてくる。

・敵も味方もみんな同じに生きている。平和を守るのも戦争を起こすのも同じ人間、そこに違いなんてないんだ。平和な毎日に戦争が侵入してくるんだ。

## 『13歳からの経営の教科書。「ビジネス」と「生き抜く力」を学べる青春物語』

岩尾俊兵 著(KADOKAWA、2022年6月)

・人は誰でも自分の人生を経営している。だから、すべての人にとって経営は必要不可欠。情熱は鍛えられないが、火をつけることはできる。

・ビジネスとは、目の前の人を「幸せにする」こと。あたらしい価値を生み出して、みんなを幸せにするのが「ビジネス」。情熱は経営にとってすべての出発点。ビジネスは多くの人や物、知識や情報、お金の集合体。

## 『12～17歳 子どもの気持ちがわかる本』

イザベル・フィリオザ 著、アヌーク・デュボワ／イラスト、土居佳代子 訳(かんき出版、2022年11月)

・子どもは思春期、親は更年期。体・心・脳はただいま建設中！ 創造性、個性、自立性を伸ばす。親より友達を優先する時期。親は過剰反応に注意。

・親の役割は、これまでと違って正面から向き合うのではなく、いつもすぐ隣にいること。1人で飛び立とうとしている子どもたちの航空母艦になり、ときどき戻ってくる彼らを受け入れて、愛情のタンクを満たし、燃料補給をすること。

## 『教師のための教育効果を高めるマインドフレーム。可視化された授業づくりの10の秘訣』

ジョン・ハッティ、クラウド・チーラー 著、原田信之 監訳、矢田尚也、宇都宮明子、津田ひろみ 訳(北大路書房、2021年12月)

・マインドフレームとは「ものごとに対する見方や考え方、とらえ方、信念」のこと。熟練教師の実践知とメタ分析によるエビデンスを融合。「最善を尽くす」だけでなく、「チャレンジ」に努める。過去・現在・未来:フィードバックの3つの視点。

・学びを価値あるものにする。授業計画を可視化。想像を超えた、ワクワクする領域に目標を設定することで、困難な状況を克服する。

## 『こんなに違う！？ ドイツと日本の学校 ～ 「自由」と「自律」と「自己責任」を育むドイツの学校教育の秘密』

和辻 龍 著(産業能率大学出版部、2020年3月)

・ドイツの学校は「合理主義」と「自己責任」の二言で表せる。学校は「教育の場」であり、部活動は地域のクラブチーム。しつけや進路・悩み相談は家庭の役割と明確に分けられている。

・ドイツらしさは「論理性」と「自己責任」。前者は理由のないことは決してやらないし、契約条件にない仕事は絶対にせず、「なぜ？」と質問して論理を前面に押し出し相手に求めること。後者は子どもであっても「何をしたいのか」を自分で選ばせること。

## 『学校に行きたくない君へ』

全国不登校新聞社 編(ポプラ社、2018年8月)

・覚えておいてほしい。私たちはどこからでもスタートできる。さまようことが自分を豊かにする。あきらめるのは、肯定するのと同じ勇気がいる。「不安がる自分」を否定せず、やりたいことをやる。

・楽しいことがあれば、それを生きる理由に。学びに年齢は関係ない、いつ始めても、いつやめてもいい。「プラスマイナスゼロ」の人生ならおもしろい。好奇心が原動力。「何をしたいかわからない」、はあたりまえ。

## 『非正規教員の研究。「使い捨てられる教師たち」の知られざる実態』

佐藤明彦 著(時事通信社、2022年2月)

・なぜ、こんな矛盾がまかり通っているのか。仕事内容も能力も正規教員と変わらないのに。この非正規教員の増加が、昨今問題となっている「教員不足」の最大要因となっている

・自治体に必要なのは「調整弁」である「非正規教員」。なぜ、そこまで必要かという、次年度すらも児童数が分からず、必要な正規教員の数が把握できないから。

## 『クリエイティブ・クラスルーム。「即興」と「計画」で深い学びを引き出す授業法』

キース・ソーヤー 著、月谷真紀 訳(英治出版、2021年11月)

・詰め込み教育による「浅い知識」はテストが終われば、たちまち忘れ去られてしまうという現実。ティーチング・パラドックスを乗り越え、「深い学び」をもたらす授業作りをするために必要なこととは何か。

・その一つの提案(回答)が”即興”と”計画”である。創造的な知識は、柔軟性があり、思考と行動を支え、新たな学びを作り、学際的な研究を支える。



## 『藤原和博の「創造的」学校マネジメント講座』

藤原和博 著(教育開発研究所、2014年2月)

- ・管理からマネジメントへ。時代が成熟社会に入り、管理だけの教育では、子どもたちを社会で通用する人間に育てることが困難になった。
- ・教員の役割は、子どもたちの「わからないこと」をわかるように、「できないこと」をできるようにすること。真摯さは「何が正しいか」だけを考え、「誰が正しいか」を考えないこと。

## 『14歳の君へ。 どう考え、どう生きるか』

池田晶子 著(毎日新聞出版、2006年12月)

- ・混乱しきったこの世界で、君はどうやって生きていけばいいだろう。「友愛」「個性」「社会」「戦争」「言葉」……。いま、考えておきたい16のこと。様々な「問い」に対しては「自分で考えてごらん」。勉強は人生を豊かにするためにやるんだ。考えるんだ。ずっと。
- ・社会をよりよくしたいのなら、他人が悪いと責める前に、自分がよくならないといけないはず。もしそんな風にして一人一人の人間がよくなったのなら、社会に規制や制約なんか、必要ないとわかるだろう。

## 『学び合う教室・育ち合う学校。 学びの共同体の改革』

佐藤 学 著(小学館、2015年7月)

- ・授業を変える、教師が変わる、学校が変わる。「学びの共同体」の3要素： 聴き合う関係、ジャンプのある学び、真正の学び。質の高い学びの創造。
- ・子どもの貧困、学力の低下、自己肯定感の低下など幾多の困難に立ち向かう日本各地の多くの小中学校。「学びの共同体」の実践、成果と課題。

## 『13歳からのサイエンス。理系の時代に必要な力をどうつけるか』

緑 慎也 著(ポプラ社、2023年1月)

・「これ、おもしろい！」が原点。発想力、思考力、行動力。すべては好奇心から生まれる。「なぜ」を見つけて、自分なりに仮説を持つ。その仮説を検証し、現象を解き明かす。

・どんなスポーツも、どんなビジネスも、他の人と同じことをやっても競争相手に勝つことはできない。だからこそ「新しさが求められる」分野で、科学の方法は特にその威力を発揮する。

---

---

## 『勉強するのは何のため？ 僕らの「答え」の作り方』

苫野一徳 著(日本評論社、2013年8月)

・正解のない問いに、納得感を得られる答えを考え、見つければいい。絶対正解はないので、自分にとつての正解でいい。勉強することは知識や学問を得ることではなく、考える力、学ぶ力を身に付けるため。

・生きたいように自由に生きたい。〈自由〉には「自由の相互承認」が必須。自分が「自由」に生きたいのであれば、人の「自由」を認めなければならないし、それを阻害してはならない。

---

---

## 『ルポ 誰が国語力を殺すのか』

石井光太 著(文藝春秋、2022年7月)

・『ごんぎつね』の読めない小学生、反省文の書けない高校生。国語力は、単に読解力の問題ではなく、「考える、感じる、想像する、表現する」という人間力の基礎。語彙だけでなく、感じる心を育む。

・家庭の中で会話する機会がなかった子どもたちは、自分の感情をうまく表現する術を持たない。それが他者とのコミュニケーション不全に繋がり、生きづらさに繋がっていく。「自分の言葉」で語る訓練。

---

---

## 『キミが勉強する理由。 藤原先生の心に響く授業』

藤原和博 著(朝日新聞出版、2008年10月)

・「つなげる力」。これを身につける近道が勉強。「つなげる力」の元になる「集中力」と「バランス感覚」は遊びで身につけ、勉強で伸ばす。楽しみながら学ぶことの大切さ。

・集中力、バランス感覚は、大人になって、どんな仕事をする際でも重要な力。それは、子どもの時にしか、養われれない。集中力、バランス感覚が大切な理由は、これからの時代が大変な時代であり、その中で生き抜く力が必要だから。その際ものをいうのが「つなげる力」。

## 『改革のカリスマ直伝！ 15歳からのリーダー養成講座』

工藤勇一 著(幻冬舎、2022年10月)

・リーダーになるのに才能はいらない。知識と技術を身につけて経験を積むこと。リーダーとは特別の存在ではなく、日常的に人を活かし、自分も生かすことができる人のこと。誰一人置き去りにしない姿勢。

・本当に必要なことは、リーダーの覚悟。リーダーの仕事は活動に関わる全員を当事者にする。自分に反感を持つ人を排除するのではなく、話を聞いてもらえるように言葉の細部にまで頭を使う。

## 『進路格差。〈つまづく生徒〉の困難と支援に向き合う』

朝比奈なを 著(朝日新聞出版、2022年11月)

・進学した高校で人生が決まる。止まらぬ負の連鎖。生徒と保護者を食い物にする「教育困難大学」と「ブラック専門学校」。旧態依然とした「高校生の就活」の慣例。

・生徒の学習意欲の低い、いわゆる「教育困難校」の生徒たちの前途が多難となっている。専門学校は退学者が多いこと、大学についてはFランクと言われる教育困難大学に進学することへの意味など問題が山積み。

## 『希望。消滅する日本で君はどう生きるか』

内海 聡 著(徳間書店、2024年5月)

・日本の水、土地、森林が外国人から買われていく。「この国はおかしい」と思う2%のあなたが目覚めれば、社会は変わる！ 唯一、道標になるものは「言葉」ではなく「行動」。一人ひとりが何をするかの「行動」であり「結果」。

・世界一人口が減り続ける日本。カネを最優先させるマスメディア。豊かさはGDPでは測れない。自分自身の健康を守り、精神的充実や自然との調和を重視する生き方を提案。

## 『みんなの「今」を幸せにする学校。不確かな時代に確かな学びの場をつくる』

遠藤洋路 著(時事通信社、2022年3月)

・子供を学校づくりの「当事者」にする。「将来」から「今」へバランスをシフトすれば教育はかならず変わる！ 激動の時代に育成すべきは「ウェルビーイング」と「エージェンシー」。

**ウェルビーイング**：個人や社会のよい状態。健康と同じように日常生活の一要素であり、社会的、経済的、環境的な状況によって決定される。

**エージェンシー**：変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力。

・民主主義の担い手を育てるために、子供とともに校則を見直す。ICTによる授業改善。教職員の「今の幸せ」のために「働き方改革」を進める。自ら考え行動する「教育委員会」をつくる。

編集・発行：(同)ドンマイ(快便研究所)

熊本県八代市長田町2900-2

eメール: info@donmai88.com

HP「快便研究所」で検索

巷にあふれる雑多な情報の中から、イノベーションを興す素材になるような有用な情報(キーワード)を選びすぐって整理しました。詳しい内容は書籍、情報元から深掘りしてください。そして研鑽、あるいは知恵(付加価値)を生み出す【知的財産】としてご活用ください。

**年間購読料：会社、自治体、経済団体等 1万円(税込み)**

**【個人の場合】は上司等に相談の上、組織購読をお願いします。**

**この『ノート』は良識派の仕事と人生を応援する読み物です。未納でのタダ読みはご遠慮ください。**